

雪と「死の願望」

——“Stopping by Woods on a Snowy Evening” 再考——

小澤悦夫

1. アメリカの国民詩人と言われたロバート・フロスト (Robert Frost, 1874-1963) の詩の中で、特に読まれ親しまれている作品に “Stopping by Woods on a Snowy Evening” がある⁽¹⁾。

STOPPING BY WOODS ON A SNOWY EVENING

- 1 Whose woods these are I think I know.
 2 His house is in the village, though;
 3 He will not see me stopping here
 4 To watch his woods fill up with snow.
- 5 My little horse must think it queer
 6 To stop without a farmhouse near
 7 Between the woods and frozen lake
 8 The darkest evening of the year.
- 9 He gives his harness bells a shake

- 10 To ask if there is some mistake.
 11 The only other sound's the sweep
 12 Of easy wind and downy flake.
- 13 The woods are lovely, dark, and deep,
 14 But I have promises to keep,
 15 And miles to go before I sleep,
 16 And miles to go before I sleep.

この詩が特に話題になったのは、一時期、この詩で作者は死の願望 (death wish) を表現しているのか、それともそのような願望は存在していないのか、という問題を巡って論争が見られたからである。現在でも、いずれかの解釈が絶対的に正しいと「正当な根拠」をもって論証されたとは聞いていないが、優れた文学作品は重層的な (複数の) 解釈が可能だからこそ優れている、という考えからすれば、決着がついていなくて当然とも言える。文学作品の解釈は読者や批評家の読み方にまかせればいいとも言えるが、一般読者は別として、文学批評にたずさわる者ならば自分の解釈を説得的な根拠をもって示す必要があるだろう。印象批評はこの場合意味をなさない。

本稿ではあらためて、この詩には「死の願望 (death wish)」が認められるのか、主題はなにか、という問題を考えてみたい。結論を前もって言えば、わたしの主張したいことは以下の点である。

- (1) a. この詩には「死の願望 (death wish)」は認められない。
- b. この詩の主題は、静かな自然の中での人と動物 (馬) との心の交流である。

また、(1a-b)に関わる要因には以下の諸点がある。

- (2) a. 雪と暗闇は静かさと自然の美しさを表現するものである。
- b. 13行目の“The woods are lovely...”の lovely という形容詞のみが唯一のあらわな感情表現であり、自然の美しさにうたれた心の発露である。
- c. 14行目の“promises to keep” および、15/16行目の“miles to go”は生きようという気持ちが込められたもので、日常的な生活意欲を表わしている。

以上の主張をできるだけ言語学の視点を取りいれて説明してみたい。

2. まず、この詩のなかで、「死の願望 (death wish)」が読みとれる理由について川崎 (1967) の説をみておく。

- (3) a. 「雪」は、古今東西を問わず、「永遠の眠り」「死」の象徴でした。…Hemingway “The Snows of Kilimanjaro” は、それをもっとも印象的に用いた一例。…三好達治「太郎を眠らせ太郎の屋根に雪ふりつむ…」草田男の「降る雪や明治は遠くなりけり」が放つ、ふしぎな感動は为什么呢。「雪」のイメージがひそめている、「死」「死者」への遠い連想がすくなくともその一部ではないでしょうか。…

「暗い森」が無意識の欲望、「雪」が永遠の眠りを暗示するとすれば、その森と雪にじっと見入る話者は Freud のいう “death wish” (死の願望) にとりつかれていることになります。

- b. “easy” “downy” (羽根布団の羽毛のような) が “sleep” のくりかえ

しとあいまって、永遠の眠りへのあこがれを暗示する。

- c. 4連3-4行(15-16行)の完全なくりかえしは、“sleep”という語を強調し、…今晚の生理的な眠り以上のものを暗示する。

のちほど詳しく述べるので、ここでは手短かに反論しておくが、(3a)は「新批評(New Criticism)」に典型的に見られる“grooved thinking”の例である。「雪」は古今東西「死」の象徴だったからこの詩に出て来る雪も死を象徴している、というのは思考放棄にすぎず、この作品そのものを読みこもうという個人の責任(自分はどう思うのか)に背を向ける姿勢だろう。雪の美しさを美しいと素直に受けとれないのも「批評家」としての見方が表に出てしまったからに思える。(3b-c)の解釈こそが、川崎(1967)が注意している stock response(出来合い反応)の例だろう。

川崎(1967)は解説記事ということもあって、詳しい分析は与えずに上記の説明を与えているだけだが、それだけに「死の願望」が存在するとされる理由を分かりやすく提出している。しかし、この問題を巡る議論はさらに時間を遡ったところでまずは行なわれており、文学批評家も一般読者も参加したにぎやかなものだった。その経過を確認して、一見単純そうに見えることがどれだけ複雑な問題にされうるか、という一例としても見直しておきたい。そのあとで、語学的な観点から指摘できることを述べてみたい。

3. 始まりは John Ciardi が *The Saturday Review* (April 12, 1958) に載せた分析である⁽²⁾。彼は、フロストのこの詩には死の願望(death wish)が存在する、と言って多数の読者や教師から猛反発を受け、再反論をする羽目になったが、全体的にみると、今では Ciardi の説のほうが多数派として専門家の中で受け入れられているようである。どんな分析をしたのかを一通りたどっておきたい。

3.1 まず彼は分析の前提として次のように言う。

- (4) Even the TV audience can see that this poem begins as a seemingly simple narration of a seemingly simple incident but ends by suggesting meanings far beyond anything specifically referred to in the narrative There is duplicity at work. The poet pretends to be talking about one thing, and all the while he is talking about many others.... It is almost safe to say that a poem is never about what it seems to be about. (Ciardi 1963, p.148)

詩が字面だけのものであるはずがないとして、必ずその裏でなにか重要な意味を伝えようとしているのか、という点については“Even the TV audience”と馬鹿にするだけですむとも思えない。素直な読者の素直な読みのほうが深読みをするのが仕事の批評家の解釈よりずっと詩の美しさを味わっていることもあるだろう。ともあれ、Ciardiはこの前提から出発して、隠れている様々な意味を探ろうとする。

第一スタンザでは、「どんな用事で出かけて来たのか」ということが書いてないが、それは「人生という用事だ」と断定し、「なぜ森の所有者のことをくたたく述べているのか。それは所有者が村=人間世界の住人であり、フロストは今その世界から一時的に離れていることをこのスタンザは表わしている」と解釈しているが、果たしてそのような深読みが必要なのだろうか。

言うまでもなくフロストは定型詩を書いており、定型詩には長所も欠点もあることを忘れるべきではない。長所としては、「かたちの美しさ」と「リズムの心地よさ」が重要だろう。どちらも詩の生命線であり、優れた詩人の腕の見せ所でもある。短所としては、かたちを整えなければならないためにあまり意味のない表現を埋め込む場合があることが考えられる。この両者が併存することもありうる。

この詩の第1スタンザに関して言えば、雪が降っている場面を設定すること

を除けば内容的にはあまり必要がない箇所であり、どんな用事で出かけてきたのか、などという問い自体が無意味に思われる。Ciardi (1963, pp.149-50) は、“Poetry cannot be discussed meaningfully unless one can assume that everything in the poem – every last comma and variant spelling – is in it by the poet’s specific act of choice.”とも言うっており、その通りではあるが、ここでは木を見て森を見ず、の嫌いがある。様々な表現を使って、静かな、雪が降りつむ暗い森の前に、自然に対して一体となる状況を述べている箇所であり、読者に迫ってくるのは「自然の静けさと美しさ」なのである。それに動物との心の交流が加わるのがこの詩の眼目（勘所）だ、というのがわたしの解釈である。

なお Ciardi (1963, p.150) は、さらに、“Clearly, the man stopped because the beauty of the scene moved him, but he neither tells us that the scene is beautiful nor that he is moved.”とも言っているが、第4スタンザでフロストは、“The woods are lovely,…”と書いており、「感動した」などという表現はもちろん必要ない。“lovely”ということばはこの詩の中でただ一つのあらわな主観的な表現なのである。これらの点について詳しくは後述。

3.2 第2スタンザでは、馬は主人がどうして止まったか分からない（人間にその問いを思いおこさせる）シンボルであり、“Can one fail to sense by now that the dark and the snowfall symbolize a death wish, however momentarily, i.e., that hunger for final rest and surrender that a man may feel, but not a beast?” (Ciardi, 1963, p.151) と唐突に、（馬には分からない）「死の願望」が存在する、と彼は断定する。ただ、一つには“however momentarily”という保留表現を付けることで Ciardi の主張はほとんど意味をなさないほど薄味になっており、さらに、馬は人間の考えを理解できない一段下の存在だという先入観があるために、この詩の真の美しさを捕らえそこなっていると言わざるを得ない。

Ciardi (1963, p.152) は第3スタンザの“the sweep / Of easy wind and

downy flake”という表現を闇からの呼び声にとらえ，“It would be so easy and so downy to go into the woods and let himself be covered over.”と言い、死の願望が触発されたと解釈しているが、これも強引過ぎる読みである。“easy”も“downy”も、静かで、ごく柔らかいもの、感じるか感じないか程度の風と雪片を指すのであり、これらは静かな自然が人間に与える安らぎ（「死」ではない）を意味すると解釈するべきだろう。

3.3 第4スタンザでは、詩の主人公が社会的義務や個人的約束を思い起こすことで、死の願望から離れて、また馬車を動かし人間社会に戻って行く、と Ciardi (1963, p.152) は解釈しており、さらには、「なぜくり返しているのか」と問いかけ、「一度目は文字通りの意味だが、二度目は“miles to go”も“sleep”も突然シンボルになる」と断定し、「このシンボルが何を意味するのはフロストも答えようとしていない、答えられないからだ」とも述べるに至る。

Ciardi は“before I sleep”は“before I take a final rest”の意味だと、フロストの言うことを無視して、あくまで死の願望が窺えると言いたいのだが、まずフロスト自身が、そんなことを意図してはいない、と言っている事実を尊重するべきだろう。フロストは、最後の二行をくり返したのは、死への祈念を暗示するためではなく、話者が陥っている眠たさの気分を強調しただけだ (Frost always insisted that the repetition of the line in the last stanza was not supposed to invoke death but only to imply a somnolent dreaminess in the speaker.), と言っていたのだから (Ellman & O'Clair 1973, p.205, Note 6)。また、前述したように、定型詩の持つ意味も考える必要がある。何もことばが浮かばなくてもなにかを表現しなければいけないのである。そのような場合、より効果的な表現が見つからなければ同じ表現をくり返すのは当たり前技法である。おまけに、それが「かたちの美しさ」と「心地よいリズム」を生むのであればさらに都合がよい。そこから読者がなにかを感じたり読みとったりするのもまた自由である（批評は、その根拠を示さなければならないが）。

Ciardi は、最後に脚韻のことに触れているが、これは後述したい。

4. もう一つ Ciardi と同じく、この詩には「死の願望」が見られる、と主張している論文に触れておく。Armstrong (1964) は、「フロストが death wish を否定することばを聞いたことはあるが、詩人が自分の詩の中に間違いなく存在する意味や意図を否定することは珍しくない」と言っただうえで、「なぜフロストはこの詩に death wish を認めたがらないのか。それを認めると “Why?” という質問に答えなければならないのがうっとうしいのか」と推定 (邪推?) している。また、「死と暗闇 / 冬との関連は自然なもの。同じような表現を使って death wish を明言した詩人がいた」と述べて実例を引いているが、他の詩人や作家が、雪や暗闇を死の願望と結びつけたとしても、フロストのこの詩 (ほかの彼の詩は問わないとして) がそうだと断定はできないだろう。雪や暗闇を死と結びつけていない詩、さらには芸術作品はいくらでもあるからである。あくまで具体的な詩作品に依って立論するのが批評というものである。もう一つの問題として、もし死の願望を認めたとして、それがより深く美しい理解と鑑賞につながるのか、ということがある。ごく素直な読みで、この詩の深く静かな美しさは味わえるのである。これらの点についても後述したい。

5.1 ここであらためてこの詩の構造と内容を考えてみよう。まず、形式としては伝統的な terza rima (三韻句法) であり (Pearson & 金関 1976, p.142), 韻律は以下に見るように「弱強四歩格 (iambic tetrameter)」である。脚韻は (5b) に示す通りである。

(5) a. Whōse wōods thēse āre Ĩ think Ĩ kñw

b. a a b a b b c b c c d c d d d d

[ɔu] [iə] [iə] [ei] [ei] [i:] [i:]

Ciardi (1964, p.155) が言うように、「英語には脚韻を踏む単語が少ないので4行のうち2行を使えばよしとし、3行できれば立派。それをフロストはこの詩で全行にわたって自然なかたちで脚韻を置くことに成功した」のである。詩人としての技術の高さと確かさは国民詩人と言われ尊敬を集めただけのことはある。また「自然なかたちで」ということも、Ciardi (1963, p.156) によれば、“Time and again I have heard him (=Frost) say that he just wrote it off, that it just came to him, and that he set it down as it came.” とのことだが、フロストのことばを文字通りにとってもいいし、それまで長いこと頭の中で発酵させてきたアイデアが一時に湧きだしたかもしれないが、読者に分かるはずもない創作の秘密を解き明かそうとする必要もないだろう。我々が分かるのは、“Free verse was like playing tennis without a net, he (=Frost) said.” (Ramazani et al. (eds.) (2003, p. 203) という言明に見るように、フロストは骨の髄から定型詩との相性を持ち合わせていた、ということだろう⁽³⁾。

5.2 別の音声面からの考察として、この詩の中で聴きとれる「音」を考えてみよう。もちろん、ほぼ全編にわたって「無音 (silence)」が支配している。雪がどんどん降り積もっている (To watch his woods *fill up with snow*) のだが、雪は音をたてない。「しんしんと」というオノマトペは静かさを伝える比喩表現にすぎない。つまりこの詩は一種の無言劇なのである。

しかし、一つだけ耳に聞こえる現実の音がある。それは、馬が鳴らす鈴の音 (He gives the harness bells a shake) だが、無音の世界の中で、ただ一つ聞こえる音の持つ意味に特別なものがあるはずだ、という解釈は自然なものだろう。「音 (sound)」ということばそのものがこの詩で使われているのは確かだが (The only other sound's the sweep/Of easy wind and downy flake), これはほとんど音がないと考えてよい。“easy” wind が音をたてるはずがないし、“downy flake” も音がしないことは言うまでもない。

もう一つのポイントは、雪に音はないが、リズムはある、という点である。

雪を表わす語句は“snow”と“flake”だけだが、闇が濃くなりつつある雪が降り積む森という場面自体に静かなリズム感が存在する。前に、第1スタンザは内容的にどうしても必要なものではなく、形式を保証するための役割のほうが大きい旨を述べたが、第1スタンザの最終行（To watch his woods fill up with snow）だけは、静かなリズム感を生み出すためには必要な表現だとは言える。このリズム感が、最終スタンザの最終行の眠り（sleep）を生み出すことに繋がっていると考えるとよいだろう。もちろん、この「眠り」は暗闇（darkness）によって誘われてもいる。

5.3 この詩は全体として静かな自然を描写しているのだが、特に注意する点として、いくつかの主観的表現が使われていることがある。

- (6) a. *My little horse must think it queer*
- b. *He gives his harness bells a shake*
- c. *To ask if there is some mistake.*
- d. *The woods are lovely, dark, and deep,*

イタリックで示した語句がそれだが、(6a-c)は馬に対する作者の主観的表現である。(6a)の little についていえば、「large と small は descriptive / big と little は emotional」という意義特徴をもっており（服部 1968, p.84）、「a little boy といえば、ふつう、その少年に対する intimacy を表わし、《かわいい》《you love him》などの connotation すなわち感情的意義特徴がある」（服部 1968, p.86）。この分析は、作者が馬に対して持っている気もちを正確に見とおしたものである。(6a)の must think も queer も作者が馬の気もちに入り込んでの表現であるし、(6b)の He や his は擬人法であり（it で指してはいないのである）、人にもものを訊く（ask）のは動物が人間のふるまいをしていることである。

また、フロストがこの詩であからさまな感情表白をしているのは(6d)の lovely 一語のみである⁽⁴⁾。まさにこの一語にこそ作者のもっとも深い心情が投影されていると考えていいだろう。

6.1 このように考えてくることで(1)と(2)で提出しておいた主題がそれなりの真実さをもってくるのが分かるだろう。つまり、この詩の焦点は第2スタンザから第3スタンザにかけての作者と馬との、静かな自然の中での(もちろん、雪と暗闇は静かさを強調するもの)心の交流だと言える。第2スタンザで馬が不審な目を向ける、そして第3スタンザでこの場で唯一の音を発し、なぜ止まったのかと問いかける(=馬の気もちになっての擬人化)ところが「こころの動き」という点からはクライマックスを形づくっているのである。言いかえると、

(7) ねえ、大将、なにしてるの？もう暗くなってきたから家に帰ろうよ

という馬の呼びかけが、この詩の焦点であり、心の交流の頂点をなしている。

この両者の心の交流を「詩」にまで高める助けをしているのが(6d)の、雪が降りつむ暗い森の静けさである。ここで使われている deep も、単に森の奥深さを表わすだけでなく、雪に蔽われつつある静かな自然の奥深さだろう。lovely の一語は、もっとも直接的かつ唯一の感情表現だが、自然の美しさにうたれたとき意識しないままに口から出たためいきのようなものに思われる。

すると、美しい自然にうたれ、またかわいい馬とも心が通いあう、というときに死への想いに誘われるはずがない。むしろ、“I have promises to keep”も“and miles to go”も生活する気が満ちている表現と見ていい。“before I sleep”は、美しい体験をしたあとでぐっすり眠ることができるという充足感を表わしていると考えられるだろう。

安藤（1958, p.45）も、第4スタンザについて、「この〈眠るまでには…〉を二度くり返しているのは、何かモラルを説いていると推定すれば、いくらでも説明が出てきそうである。だが、私はこれをあまり教訓的に解釈することには反対である。自然の美しさに接しても、そこで自分の生活にたいする意識が、並行して浮び上っている—そういう人間の営みの間に入ってくる自然こそ、ほんとうに美しく感じられるということを知れば十分であろう」と述べているが、わたしの感じたことを優れた文学研究者が的確に指摘してくれたように思われる。

6.2 馬と人間との心の交流などということがフロストの詩に認められるのか、という点にもふれておきたい。わたしは、この詩を素直に読めば感じることができると思うが、フロストが色々な動物に対していつくしみの気もちをもって接していたこと、それをいくつかの詩に表現していることを安藤（1958, pp.52-54）が指摘しているので見ておく。

代表例として「冬のエデン（A Winter Eden）」が翻訳で全編引かれているが、原詩をあげておく。

A WINTER EDEN

A winter garden in an alder swamp,
Where cronies now come out to sun and romp,
As near a paradise as it can be
And not melt snow or start a dormant tree.

It lifts existence on a plane of snow
One level higher than the earth below,
One level nearer heaven overhead,

And last year's berries shining scarlet red.

It lifts a gaunt luxuriating beast

Where he can stretch and hold his highest feast

On some wild apple-tree's young tender bark,

What well may prove the year's high girdle mark.

So near to paradise all pairing ends:

Here loveless birds now flock as winter friends,

Content with bud-inspecting. They presume

To say which buds are leaf and which are bloom.

A feather-hammer gives a double knock.

This Eden day is done at two o'clock.

An hour of winter day might seem too short

To make it worth life's while to wake and sport.

以下、安藤（1958, p.53）は次のように続ける。「この詩は、いうまでもなく、名画にあるような透徹した自然観照から生まれたものである。だが、単に自然観照と言うだけでは足りない、ここに出没する獣や小鳥が、文化映画の一コマのように、活々と動いているのだ。動物の生態を目のあたりに眺められるのだが、彼らを眺める詩人の眼は、いかにもいつくしみ深く、ユーモアを含んだ観方の底に、温かい愛情がこもっている—こういう生きものを、人間と同じものとして考える、美しい思いやりをもって、静かに見つめているのに相違ない」

この見方が馬に対しても見られるのは言うまでもないだろう。そして、これらの詩が決して散発的なものでない証拠に、安藤（1958, pp.53-54）はさらに

いくつもの詩を取りあげている。「この種類の詩は、まだ他にもあったのを思い出す一草を刈った時に、光と暑熱にさらされている巣の中のひなどりを憐れむ〈むき出しになった巣〉(The Exposed Nest)、愛人同士が林の奥で出会う、雌雄二匹の鹿、自然と人間が互いに心を交わし合う〈二匹が二人を見つめる〉(Two Look At Two)、草刈りの見知らぬ男が蝶のために、一かたまりの花を残しておいたことを知って、《ひとはいっしょにいても、別々にいても、仕事をするのはいっしょなのだ》と心の中で喜ぶ〈花の一むれ〉(The Tuft of Flowers)、それから、あまりに早く雪が訪れたときに、初めて雪を見てびっくりした春生まれの小馬が、牧場の垣をこえて逃げ出したのを心配する〈逃げた小馬〉(The Runaway)など、生きものに寄せる心情が、人間にたいすると同じように、いかに優しいかを示すものである」

以下、ここでふれられている関係箇所をいくつか見ておこう。

THE EXPOSED NEST

.....

'Twas a nest full of young birds on the ground
 The cutter bar had just gone champing over
 (Miraculously without tasting flesh)
 And left defenseless to the heat and light.

このあと、巣を元にもどしてやろうとし、しかし戻って来た親鳥が不審に思うのではないかとも心配し、その場を離れるのだが

I haven't any memory - do you? -
 Of ever coming to the place again

To see if the birds lived the first night through,
And so at last to learn to use their wings.

と歌い終わる。子鳥に寄せる思いは誰にも伝わってくる。

THE TUFT OF FLOWERS

... swift there passed me by
On noiseless wing a bewildered butterfly,
...
And once I marked his flight go round and round,
As where some flower lay withering on the ground.

And then he flew as far as eye could see,
And then on tremulous wing came back to me.
...
A leaping tongue of bloom the scythe had spared
Beside a reedy brook the scythe had bared.

The mower in the dew had loved them thus,
By leaving them to flourish, not for us,
...
The butterfly and I had lit upon,
Nevertheless, a message from the dawn,

That made me hear the wakening birds around,

And hear his long scythe whispering to the ground,

...

安藤（1958, pp.53-54）が述べていることに加え，ここで引用した箇所でも “a *bewildered* butterfly” とか “on tremulous wing *came back to me*” という表現に小さな生きものに心を通わせる詩人の思いが窺われる。

THE RUNAWAY

...

The other curled at his breast. He dipped his head
And snorted at us. And then he had to bolt.

...

Where is his mother? He can't be out alone.”
And now he comes again with clatter of stone,

...

“Whoever it is that leaves him out so late,
When other creatures have gone to stall and bin,
Ought to be told to come and take him in.”

逃げた子馬に対する優しい気もちは，最後の行で，自分と同じように子馬を大切にしていない人間に向けての批難ぶりにも見てとることができる。フロストが小さな生命から大きな動物まで生きものに寄せる愛情は疑いないものだと言えるだろう。

川崎（1967）は，馬は日常的に営まれている実際的な生活パターンに合致するよう訓練されているから，歩みをとめるのは用事をすますときだけであり，

畜生の悲しさで、そのパターンを脱け出せないから、いぶかしみ、鈴をふり、主人を目覚めさせようとする、と述べているが、これは馬（動物）を畜生扱いする人間の傲慢さを表に出す解釈であり、安易な人間中心的解釈である。自然との一体感をもてるのは人間だけだという傲慢な思い込みであり、動物こそ自然に、文字通りより自然に、融けこめるのである。むしろ動物のほうが人間よりも自然の一部になりうるのである。

7. 作者の意図と「批評家」の深読みとについても簡単にふれておきたい。Ciardi (1963) も Armstrong (1964) も、作者（この場合はフロスト）がどう言おうと、作者本人でさえ気がついていないものが作品に含まれており、それを取り出すことはできるし、さらに、そのような分析が文学を普遍的にとらえることになる、という観念にとらわれているように思われる。第4スタンザの3行目と4行目をくり返したのは、フロストによると、「死への祈念を暗示するためではなく、話者（=作者）が陥入っている眠たさの気分を強調しただけ」（Ellman & O'Clair (eds.) 1973, p.205）だが、この発言を素直に受けとってはいけないわけがあるのだろうか。眠ることは死への一里塚と決まっているのではなく、あすへのエネルギー補給でもあるというごく当たり前のことを思い出しでもいいだろう。

この点に関して阿川（1971）が、安岡章太郎の「志賀直哉私論」についてのおもしろいエピソードを記している。

- (8) 「志賀直哉私論」を雑誌に連載中、読んで私は安岡に、「シャーロック・ホームズを読んでいるような面白さがある」と言ったことがある。長年志賀先生の作品を愛読している私が、今まで全く気づかなかったような点を取り上げて、そこから独特の推理をし、強引にそれを立証して行く過程が面白く、その閃きというか彼一流の鋭い観方に時々ハッとさせら

れた。

しかし中には、たとえ意識の深層部においても、志賀さんはその時こういう風に思っておられたのだろうか、どこまでこれは事実だろうか、首をかしげなくなる部分もあり、この作品は「志賀直哉私論」ではなくて「安岡章太郎私論」ではあるまいかと思ったりもした。

一本にまとまっただけのち、私がある日志賀家へ伺うと、果して、「安岡君のあれには、どうもちょっと困ったね。こっちがおよそ考えてもいなかったようなことだからね」

と、いくつかの箇所を挙げて、志賀先生は少し不愉快そうな表情であった。

志賀直哉がどの箇所を不愉快と感じたかはこの記述から窺えないが、たとえば次の描写などはその例と見ていいのではなかろうか⁽⁵⁾。

しかし、これらの文章（＝「母の死と新しい母」「白い線」「続創作余談」）から何よりも強く感じられるのは、志賀直哉が十三歳で死に別れた実母によせる情の深さである。それは単に思慕しているというより、ほとんど性欲に近い匂いが感じられるほど、読む者に強く迫ってくる。それは《母はよく父に私が我儘で、云ふ事をきかないと泣いて訴へたさうだ。》という何でもなような一行にも滲み出るように漂って感じられるのであるが、そのことが一層端的にあらわれているのは、『白い線』の結びの数行である。

…然し今でもはつきり憶ひ出せるのは母の足のふくらはぎに白い太い線のあつた事で、母は女中のやうに尻を端折り、白い腰巻を出し、四這ひになってよく縁側を拭いてゐたが、そのふくらはぎにその白い線があつたのを憶ひ出す。私は若い頃、女の人の足で、

それを見る度に亡くなつた母を憶ひ出した。私はふくらはぎの白い線で漸くはつきり母を憶ひ出す事が出来るのである。(p.16)

こんな何でもない一行からも母への性欲を嗅ぎつけられたら作者も迷惑だろうと察せられるが、次の箇所もそうだろう。

…尾道で『時任謙作』を書きあぐね、結局書けずに東京へ舞い戻って電車にハネられる事故に遭うのは、事故というより半ば無意識の自殺であったかもしれず、少なくとも当時の志賀氏に潜在的な自己否定の欲求が不断に強く働いていたことは、たしかだろう。(p.64)

たまたま不注意で電車にはねられたことが無意識の自殺願望だった、と言われたら本人は当惑するだけだろう。このような「作者でさえも思っていなかった」解釈をすることがまったく無意味だとは言わないが、その場合は、そのような解釈の根拠がはたしてあるのか慎重な考慮が必要になるし、その解釈者の信頼度にも依ると思う。

§3.2でも述べたように、「ほんの瞬間的にでも (however momentarily)」何かが感じられたら、それは存在する、という主張は明らかに無理であり、そのような解釈が認められたら何とでも言えることになってしまう。

8.1 雪が必ず古今東西どこでも死を連想させるかといえは、もちろんそんなことはない。先に見たように、川崎(1967)が、(3a)の発言をするのは短絡的と言うしかない。三好達治の「太郎を眠らせ…」が与える不思議な感動の一部に「死への遠い連想」がある、とのことだが、この詩に死との連想があるというのは間違った読みだと思う。わたしは、この詩からは、たとえば安藤広重の名作「東海道五十三次・蒲原」が浮かんでくる。日本の伝統的な村が雪に蔽わ

れた景色—ここからは静かな美しさを感じられるだけだろう。傘をさしてゆっくり歩いているむかしの人たちも懐かしくけげな我々の「同時代人」なのである。建物はむかしのものだが雪景色はいまも同じであり、この雪が日本の美しい風景の原像のひとつを成して現代に続いている。先人を想ったからといって、それは死を思うことではない。また、「太郎を眠らせ…」を読んでたいいの人が思い浮かべるのは「雪やこんこ霰やこんこ / 降っても降ってもまだ降りやまぬ / 犬は喜び庭駆けまわり / 猫は炬燵で丸くなる」という文部省歌なのではないだろうか⁽⁶⁾。そこでは犬が「喜んで」駆けまわっているのであり、それを見て人は嬉しがっているのである。

広重以外の絵師では川瀬巴水(1883-1957)がすぐに浮かぶ。巴水は日本各地の四季折々の風景を版画に描き続けたから、冬景色=雪景色もその生涯を通じて多くの作品がある⁽⁷⁾。その中でも特に有名な「東京二十景・芝増上寺」(1925)の美しさは雪景色の美しさであり、画面から感じられる静謐さも(風は多少あるが)、傘をさして歩く和服の女性も、広重の「蒲原」に通じるものである。巴水の絶筆である「平泉金堂」(1957)の雪景色にも「雪景色を突き抜けた祈り」はあるかもしれないが、「死の願望」はもちろん、死を連想させる類のものはないだろう。このあと作者はすぐ死んだから、といううがった考えは素直な鑑賞には無縁なものである。

広重と巴水をつなぐ絵師としては小林清親(1847-1915)が重要な存在である。清親の「東京名所図・海運橋(第一銀行雪中)」(1876)は広く知られている名作であり、雪の中を歩いている何人かの人々と雪景色が醸し出す静かな美しさは広重の「蒲原」を思いおこさせるとともに後の時代の巴水の先駆けともなっている。傘をさし和服を着て下駄をはいて歩いて行く後ろ姿の女性は、「蒲原」で蓑傘をつけて歩く旅人たちや傘をすぼめて歩く人物の直系だろう。むかしの人たちを想うということは決して死を思うことではない。過去から現在まで連綿と続く「同時代人」としての先人に同じ日本人としての愛情を感じるこ

とである。雪という汚れのない自然の点景が日常的な挟雑物を浄化してくれるからこその静謐さなのだろう。我々は絵画を見たり詩を読んだりして、その美しさを視覚や聴覚で味わえばよいのである。

このようなことを見ておくだけで、「雪＝死」という関係は普遍的なものではない、ということが明らかだろう。雪が死を意味したり結びついたりするのは、作者が死を意味させようとした時であり、作者がそのような意図がないのに読者、特に批評家が両者を結びつけるのは公式や「定説」に影響されている面が大きいと思われる。

8.2 英詩の一例として、現代アメリカ詩人の Robert Bly をあげておこう⁽⁸⁾。彼はアメリカ中西部の雪の多い地方 (Minnesota) で生活してきた詩人だが、雪を歌った詩はもちろん多く書いており、その作品は死とは反対の明るさを感じさせるものになっている。

DRIVING TO TOWN LATE TO MAIL A LETTER

It is a cold and snowy night. The main street is deserted.
 The only things moving are swirls of snow.
 As I lift the mailbox door, I feel its cold iron.
 There is a privacy I love in this snowy night.
 Driving around, I will waste more time.

WATERING THE HORSE

How strange to think of giving up all ambition!
 Suddenly I see with such clear eyes
 The white flake of snow

That has just fallen in the horse's mane!

IN A TRAIN

There has been a light snow.

Dark car tracks move in out of the darkness.

I stare at the train window marked with soft dust.

I have awakened at Missoula, Montana, utterly happy.

どれも短い詩だが、雪に触発された内心の幸せな気持ちを歌っており、静かで美しい（白という色は美しい…）自然に溶け込む、また馬に心を寄せる、詩人の息遣いが素直に感じられるだろう。もう一篇、特に優れた詩を引いておく。

SNOWFALL IN THE AFTERNOON

I

The grass is half-covered with snow.

It was the sort of snowfall that starts in late afternoon

And now the little houses of the grass are growing dark.

II

If I reached my hands down, near the earth,

I could take handfuls of darkness!

A darkness was always there, which we never noticed.

III

As the snow grows heavier, the cornstalks fade farther away,
 And the barn moves nearer to the house.
 The barn moves all alone in the growing storm.

IV

The barn is full of corn, and moving toward us now,
 Like a hulk blown toward us in a storm at sea;
 All the sailors on deck have been blind for many years.

この詩の詳しい言語学的分析はほかで行なっているので (Kozawa 1993=2013), 省略するが, 雪に触発されて闇の意味を再認識させられ, 自分の心の中にまで自分の置かれた意味を探ろうとする意識には近代人としてのきわめて新しい感覚が見てとれるものである。もちろん死の意識などはまったくない。Bly はもっと明るく肯定的に周りの自然を見ているのである。

9.1 最後に, フロストのこの詩の言語学的分析をあつかった論考にふれておきたい。一つは Ross (1982) である。この論文で Ross は, 「立ち止ったのは人生という旅路を一時中断したのであり, 死が身近にあるのを感じた瞬間である (...they [=most readers] will feel the journey to be our journey through life with the stopping then being equated with a moment in which we feel the closeness of death —)」(Ross 1982, p.685) という主張から出発しているが, あまりにこの詩を一般化 (=人間の経験の普遍性を強調) しすぎているように思われる。Ross は, この詩のことばの力がどこから来ているのか, 文法構造がどのような貢献をしているのかを以下論じているが, 簡潔にみておきたい。

Ross は、言語表現を分析した上で、「中心は第3スタンザ。そこでは動きが止まり、主体と客体が溶け合う (...it is the kind of transcendental, cosmic, experience in which the distinction between observer and observed, between subject and object, vanishes.)」(Ross 1982, p.688) という旨の言明を行なっているが、ポイントの一つを見ておく。この詩の各スタンザの各行の最後の単語は次のような品詞である。

(9) I: V	II: Adj	III: N	IV: A
Adj(Conj?)	Adj(P?Adv?)	N	V
Adv	N	N	V
N	N	N	V

そして Ross (1982, p.689) によれば、死と生は(10)のような関係をもっている。

(10) Life	Death
Verbs	Nouns
Vowels	Consonants

つまり第3スタンザで死に近づき、第4スタンザでまた生へ戻る、というわけである。さらに、第3スタンザの最後の単語(名詞)は元は動詞であって、それが名詞化したものだから「生→死→生」の揺らぎが見てとれると言いたいようであり、また11行目では、“sound is → sound’s”と存在を表わす be 動詞の母音が消えている、つまり生命が消えており、ここでも「生→死」というパターンが見られるというのである。

また、この詩の4つのスタンザは人生の四期に対応している (Ross 1982,

pp.690-91) ことになる。

(11) I: 0-20 ⁺ 歳	II: 20-40 ⁺ 歳	III: 40-60 ⁺ 歳	IV: 60-70…歳
Spring	Summer	Fall	Winter

中年の危機 (mid-life crisis) は40代初めであり、フロストがこの詩を書いたのは47歳のときだから、中年の危機 (死を思う時期) を乗り越えて人生の第4期に向かうというのがこの詩の意味だと言いたいようだが、ここまで来ると志賀直哉の不快感があらためて思われるのではないか。

名詞が死とつながりをもち、動詞が生とつながっている、という考えにも根拠と言えるほどのものは提出されていない。このほかの統語的分析などは省略するが、興味深い点もあり、よく思いついたと感心する論点はあるにしても、果してフロストの詩を素直に味わうためのプラスになっているかは疑問に思われる。

9.2 もう一つの言語学的分析として松山 (2012, pp.114-22) に簡潔にふれておく。この分析は基本的に Ross (1982) などの議論に従っているのだが、(9) の最後の単語をもう少し詳しく分類した上で

やや弱い動作 (= 生) から入り、第3連第3行では最も静止 (= 死) した状態を暗示し、そこから (動作性という点では hit や run などには及ばぬものの) sleep という動作動詞で表される程度には生の活力を回復していく様子が示されているのである。動詞性と名詞性が、活動と休止、ひいては生と死と結びついていることをここまで表しうるのは Frost の詩人としての天才のなせる業であろう (松山 2012, pp.120-21)。

と述べている。やや弱い動作とは状態動詞の know であり、最も静止した状態

とは sweep のことだが、sweep が死を暗示するという解釈は無理だろう。また Ross と同じく、動詞が生を表わし名詞が死を表わすという断定自体に根拠がないのである。動詞は動画であり名詞は静止画だと言っても（松山 2012, p.119）、それが生と死に結びつくというのは、死を表わす動詞もあれば、活力を表わす名詞もあることを考えるだけで概念的な決めつけにすぎないことは明らかだろう。

さらに、Ross (1982) と同じく、一人称代名詞が、第 1 スタンザでは主格 (I) と目的格 (me)、第 2 スタンザでは所有格 (my)、第 3 スタンザではなくなり第 4 スタンザで主格が 3 回使われているが、これは動作の主体 (agent) があつたものが途中で消えてしまい、また最後で復活することであると述べ、次のような解釈を示している。

詩全体としては、生きること（やや大げさに言えば生老病死）をモチーフとし、作詩時点でのやや弱まった「動」に始まり、「静」へと傾斜し、完全な静止直前での思い止まり、そして逆にやや強められた「動」へと心動きを、まさに‘天才’ Frost が、品詞や第一人称代名詞の無意識の使用によって見事に表していると断じたいところである（松山 2012, p.122）。

この解釈、および Ross (1982) の解釈、をもしフロストに示したとしたら、そんな意図でこの詩をつくったのではない、と言ったのはこれまで見てきたところからも明らかだろう。フロスト自身が否定しているからである。作者が否定している意図を認めるためには「無意識的」という作業仮説を持ち出すしかないが、果してそうすることで、この詩の美しさをより深く味わえるのか、という問題が残るのである。

10. 優れた詩は重層的な解釈が可能だ、という考えにはそれなりの正当性があるのは確かだが（フロストは特にそのような詩人でもある）、どんな解釈もありうる、という考えはもちろん誤りであり、常識的に正しそうな解釈でも、作品自体の読み込みを欠いていればやはり認めるべきではないだろう。ここで「読み込み」というのは第一に言語表現の正確な語学的理解であり、さらには優れた文学的センスとリズム感に基づいた解釈を意味する。もちろん健全な常識（common knowledge と common sense）も必要となるだろう。

文学研究者は文学作品を理解することができるだろう、というのも思い込みには過ぎない。たとえば、優れた作家であり、優れた批評家でもあった丸谷（2013, p.152）は次のように述べている。

この人物（＝谷沢永一）は、近代文学の学者にしては珍しく文学がわかる人だつた。いはゆる近代文学研究は、文学の魅力に対して鈍感と言ふよりもむしろ無感覚な人士によつておこなはれるのが普通だけれど、彼は極めて稀な例外に属してゐて、文学の美的な局面にも、観念的な要素にもよく反応した。文学的感覚が豊かだつたし、思考力にも長けてゐた。まづ第一に文学作品の読者としての資質に富んでゐた。

文学がわかる学者のほうが例外なのである。また、優秀な学者でもその時の流行理論に縛られがちだ、という事情もある。読者としては、ふだんから優れた作品を読んでいること、信頼できる批評家の書いたもので作品の読み方を示してもらふこと、が必要だろう。そのあとは自分の読みを大事にすればいいのである。

もう一つ同じ趣旨の発言を引いておきたい。小林秀雄と大岡昇平の対談に以下の箇所がある⁽⁹⁾。

大岡 ところで文学の研究者というのは不思議な存在だね。一つの筋を調べはじめると、そっちの方ばかりに頭が行っちゃうんだ。その筋に関係のある材料だけをひっばってくる。

小林 人生を知らない者が、人生について知った人のことを研究しようとしているわけだ。これは無理だ。最初からもう、逆の方向に走っている。それがどうしてうまい具合に行くか。不自然なことだ。研究者が人為的に事柄を合わせるんだよ。 (『直観を磨くもの』 pp.354-55)

小林の発言は批評家や研究者には特にこたえるものだろう。何が本当に正しい解釈かに自信をもてなくなるものだからだ。実際に、フロストのこの詩に関しては

“It (=“Stopping by Woods on a Snowy Evening”) has been read as ‘simply’ a beautiful lyric, as a suicide poem, as recording a single autobiographical incident, and everything in between.” (Oster 2001, p.161)

というありさまなのである。

もっとも批評界ではいまでも Ciardi (1958) などの説が主流を占めているらしい。Gray (1990, p.133) はその一例である。

This (= ll.15-16) could, after all, be a metaphorical reference to the brief span of human life and the compulsion this puts the narrator under to take risks and the truth while he can. Only a few ‘miles’ to go before ‘I sleep’ in death: such a chilling *memento mori* perhaps justifies stopping by the woods in the first place and considering the spiritual

guest implicit in the vision they offer. Perhaps: the point is that neither narrator or reader can be sure.

最後に念を押しているように、誰も断言はできないのであるが、それにしても“could, after all” “perhaps justifies” “implicit” などといった単なる推測にすぎない言い方が多すぎるくらいがある。おまけに“Only a few ‘miles’ to go before ‘I sleep’ in death: such a chilling *memento mori*”という大胆な断言までしたうえでのことなのである。

一つ付け加えておくと、この詩の構成は第1スタンザから第4スタンザまで、古来からの「起承転結」に従っている。まず雪景色を設定し（起）、それを承けて、その場所で馬が立ちどまり（承）、静かな場面に鈴の音が聞こえる、つまり場面が展開して揺れ（転）、最後に、最初に設定した場面に戻って感興を深めて終わる（結）、という流れである。この詩が古典的なたたずまいをもつ所以であり、伝統的なリズム構造と相俟って詩としての美しさをつくりあげている。

フロストのこの詩に関しては、言語表現の基本を押さえたうえで、あくまで素直な受け取り方をすればいいと思う。雪は死の願望を意味する、という解釈こそ手垢にまみれた間違っただけの一般化である。日暮れた静かな雪景色、暗くなりつつあっても人をおびえさせるような闇の森でもない、可愛がっている馬と二人きり、立ち止まると馬の鈴が聞こえ、馬が自分をふりむいて見る、あらためて周りを見ると美しい雪景色—この静かな美しさに満ちた景色を見事なりズムをもった表現で描いている詩… あとはただフロストの詩の美しさを味わえばいいのである。

注(1) フロストの作品の引用はEdward Connery Lathem (ed.): *The Poetry of Robert Frost* (New York, N.Y.: St. Martin's Press, 1979) による。同書では作品のタイトルはすべて大文字にしており、初出の詩集 *New Hampshire: a Poem with Notes and Grace Notes* (Henry Holt & Co., 1923)

でも同じである。本稿では、作品を引用する時の正式タイトルとしては大文字表記に従い、ほかの箇所では読みやすさを勘案して通常の表記に従う。“STOPPING ~”の左端の行数は筆者（小澤）がつけたものである。

- (2) Reprinted in John Ciardi: *Dialogue with an Audience* (1963). 以下、引用は同書による。
- (3) Gray (1990, p.131) にフロスト自身の発言が引かれている (“I had as soon write free verse as play tennis with the net down.”)。フロストの別の関連する発言も載っている (“...my nerves are so susceptible to sound.”)。
- (4) POD³によると、lovelyの意味は“exquisitely beautiful; (Colloq.) delightful, intensely amusing”だが、“exquisitely”や“delightful”にlovelyの主観的含蓄が見られる。
- (5) 引用は、安岡章太郎『志賀直哉私論』（1968、文藝春秋）を元版とした『安岡章太郎随筆集4』（1991、岩波書店）による。
- (6) 「雪」の引用は、『日本の詩歌 別巻 日本歌唱集』（中公文庫、1974）による。引用したのは二番の歌詞で、一番は以下の通り。
 「雪やこんこ霰やこんこ / 降っては降ってはずんずん積る / 山も野原も綿帽子かぶり / 枯木（かれき）残らず花が咲く」
 この歌詞は「花咲か爺さん」を思わせるが、二番の歌詞のほうが犬や猫という人間にとっていちばんの動物の伴侶を登場させたことで、さらに日常的な喜びが感じられる。二番の歌詞のほうがはるかに広く歌われているのもそのせいだろう。
- (7) 「川瀬巴水特別展 一生誕130年記念—」（大田区立郷土博物館、2013年10月27日～2014年3月2日）が特に参考になった。この展覧会は前期・中期・後期と分けてほぼ500点の作品が展示され、巴水の業績の全貌が窺えるものだった。
- (8) 引用は、Robert Bly: *Silence in the Snowy Fields* (Middletown, Con.: Wesleyan University Press, 1962) による。
- (9) 初出は「文学の四十年」『日本の文学 43 小林秀雄』月報（中央公論社、1965）。引用は『直観を磨くもの 一小林秀雄対話集—』（新潮文庫、2014）から。

REFERENCES

- Armstrong, James (1964), “The ‘Death Wish’ in ‘Stopping by Woods” College English Vol.25, No.6, pp.400+445.
- Bly, Robert (1962): *Silence in the Snowy Fields* (Middletown, Con.: Wesleyan University Press)
- Ciardi, John (1958), “Robert Frost: The Way to the Poem” The Saturday Review, April 12. Reprinted in *Dialogue with an Audience* (Philadelphia & New York: J. B. Lippincott Co., 1963) pp.147-57.
- Ellman, Richard & Robert O’Clair (eds.) (1973): *The Norton Anthology of Modern Poetry*, 2nd Edition (New York, N.Y.: Norton)
- Faggen, Robert (ed.) (2001): *The Cambridge Companion to Robert Frost* (N.Y.: Cambridge University Press)
- Gray, Richard (1990): *American Poetry of the Twentieth Century* (N.Y.: Longman)
- Kozawa, Etsuo (1993), “Robert Bly’s ‘Snowfall in the Afternoon’: An Exercise in a Linguistic Analysis of Contemporary Poetry” Lexicon No.23, pp.42-54. Reprinted in 『英語学試論集』（私家版, 2013） pp.241-56.
- Latham, Edward Connery (ed.) (1979): *The Poetry of Robert Frost* (New York, N.Y.: St. Martin’s Press)
- Oster, Judith (2001), “Frost’s Poetry of Metaphor” in Faggen (ed.) (2001), pp.155-77.
- Ramazani, Jahan, Richard Ellmann & Robert O’Clair (eds.) (2003): *The Norton Anthology of Modern and Contemporary Poetry* (New York, N.Y.: W.W. Norton)

- Ross, John R. (1982), "Hologramming in a Robert Frost Poem: The Still Point" in The Linguistic Society of Korea (ed): *Linguistics in the Morning Calm* (Seoul: Hanshin Publishing Co.) pp.685-91.
- Pearson, N. H. & 金関寿夫 (1976) 『現代アメリカ詩』 (東京: 英宝社)
- 阿川弘之 (1971) 「安岡章太郎 一その頑固な独断流一」 『安岡章太郎全集 第4巻』 月報 (東京: 講談社)
- 安藤一郎 (1958) 『フロスト』 (東京: 研究社)
- 川崎寿彦 (1967) 「英詩の読み方読ませ方」 『現代英語教育』 1967年11月号, pp.6-7.
- 小林秀雄ほか (2014) 『直観を磨くもの 一小林秀雄対話集一』 (東京: 新潮社)
- 服部四郎 (1968) 『英語基礎語彙の研究』 (東京: 三省堂)
- 松山幹秀 (2012) 『言語の探求と思索』 (東京: 開拓社)
- 丸谷才一 (2013) 『別れの挨拶』 (東京: 集英社)
- 安岡章太郎 (1991) 『安岡章太郎随筆集4』 (東京: 岩波書店)